

ナイアガラタイムス

2021年9月1日 第7号

人 力 夢



目次

名盤探検隊⑥ 鈴木雅之『マザー・オブ・パール』・・・2

THE極み 『車の話』 竹島正和さん・・・3

美味しい話⑥ 『月刊アベチアキ』・・・7

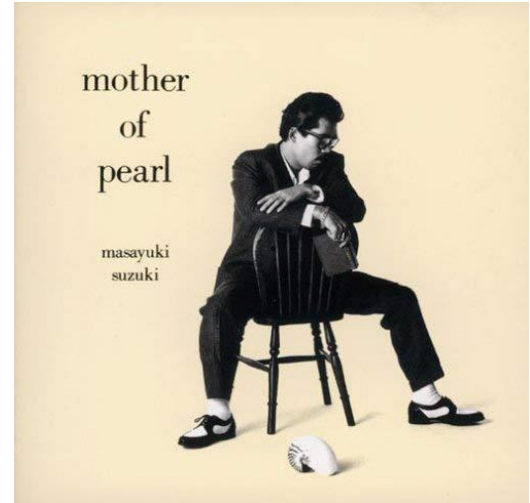
【名盤探険隊】⑥

鈴木雅之「マザー・オブ・パール」(1986年2月発売)

滝が中学に上がった頃、顔を黒塗りにして歌うバンドが出てきた。

『シャネルズ』だ。

鈴木雅之は、東京大田区大森の高校の仲間が集まって、ブラックミュージックのドウ・ワップという音楽を基礎に活動してきたバンド『シャネルズ』のリーダーだ。



デビューしてしばらくはヒットを飛ばし、『ザ・ベストテン』にも常連のように出演していた。その番組でこんな事があった。

それは中継先から視聴者の質問を受け付けるコーナーでの事だった。ある青年から「黒人のくせに何故シャネルズなのか」という問いがあった。リーダーの鈴木は平然とした顔で「ブランド名が元になったのではない」と答えた。が、その後、司会の黒柳がなにかを涙ながらに訴えていた。滝は、いつもは寝かせられていた時間だったのに、この時は何故か、その場面をリアルタイムで見ている。当時は「なにか人種差別の事を言っているみたいだけど、なんだろう」と思っていた。その30年後に「金スマ」でこの映像が流れた。黒柳が言っていたのは「人を〇〇のくせにという人見下すような事は絶対に言わないでほしい」という言葉。記憶していたよりシンプルな言葉だった。ただそれは、誰もがいつも心にとめておかないといけない事だと思った。

さて、このコーナーは「名盤探険隊」、アルバムのお話をしましょうか。

これは鈴木雅之のファーストソロアルバム。チャートの最高位20位。人気グループからのソロ一枚目としては、そんなにセールスはいかなかった。だがその後「ラブソングの帝王」と呼ばれる至ったシンガーのストーリーは、ここから始まった。

これと同時に発売されたシングル「ガラス越しに消えた夏」がとても好きで、このアルバムのカセットテープを買った。

滝は当時、高校を卒業したばかり。初めて出会う人達、初めての経験に目を輝かせていた。その頃、よく聞いていた。

このアルバムのラスト前に、アカペラの曲で「ジャスト・フィーリング・グローヴ」というのがある。この曲を聴くと、当時を思い出して、今聞いても胸が熱くなる。

『車の話』

町田市小山町 車販売サポーター 竹島正和さん

今回の「極み」は、車の事を取り上げようと思った。俺は車好きでもなく知識もなかった。ただ「車の事をやってみたい」という胸騒ぎのようなものを何故か感じていた。それは車から見える過去未来、そして世の中の事が分かってくるような気がしたからだろう。

たまたま知り合いのご主人が車の仕事をされていて、お願いしてみたら快く取材を引き受けて下さった。

竹島さんとは初対面で、しかも打ち合わせなしで、取材に臨む事になったのだが、話をしているうちに「俺は、こういう話を聞きたくて、車の事を取り上げようと思ったんだ」と痛感した。

ちなみに俺は、この取材の帰り道、軽自動車に見惚れていた。

尚、今回は、竹島さんのあふれる情熱を伝えたく、対話形式ではなく、彼のお話しに耳を傾けたいと思います。

【私は、車には興味がなかった】

車って、大人子ども問わず好きな人は好きだけど、私は興味がなかった。車には乗っていましたがけれど。

サラリーマンだったんです。いろんな事があって仕事を辞めざるを得なくなった。それで車を販売する仕事に16年ぐらい前に就いた。その頃の私は車について素人だった。奥が深く勉強もしないといけなかった。



【日本は、実は車大国】

日本って、我々が考えている以上に車大国だと思う。ひとつ私が思ったのは軽自動車、あれって日本にしかない。アメリカに行ってもヨーロッパに行っても南米に行ってもない。

調べてみると、軽自動車の何がすごいかというと、軽の規格。長さとか高さとか幅とか排気量、その中でつくる事を民間企業が戦後から始めて非常に高い完成度になっている。

もうひとつは、軽自動車をまとめる軽自動車協会というのがある。普通車だったら運輸局。そこから全く違う組織になっている。だからこれは、日本の官僚と民間が協力してつくりあげてきた。今まで世界に例がない事を日本はやってきた。

【自動車産業を引っ張ってきたのは敗戦国】

戦後、まぎれもなく自動車を引っ張ってきたのは、日本とイタリアとドイツ。これは奇しくも敗戦国。敗戦国の人達が力を合わせて自動車産業をつくりあげてきた。日本は世界から見ても素晴らしい。

【軽自動車のすごさ】

ひとつの例をあげると、やっぱり軽自動車。スズキの「ジムニー」。これは、真四角のラダーフレームで四駆でターボ。軽自動車でありながらジープ、これは素晴らしい。トヨタはハイエースとかランドクルーザー。マツダはスポーツカーの名車がある。

軽自動車は決まった条件の下で造りなさいという事で造られた。最初はなかなかうまくいかなかった。最初の頃は事故が多かったり、様々な問題もあった。やっぱり続ける事ってすごいと思う。弛まぬ探求心というか。

車造りは、自分達の利益だけを追求していたら出来なかったと思う。日本を良くしたいという情熱があったから出来た。軽自動車って税金も安いし、軽トラとか軽バンとか、日本の産業が大きく前進している時にすごく役に立った。

軽自動車協会があって、そこで税金も徴収して、全く違う組織をつくった。官にも民にも軽自動車に向けた情熱を感じられずにはいられない。我々は軽が走っているのが当たり前、それもエアコンつけてターボで快適に走っているのを普通の光景として見ているけれど、それが外国に行ったら当たり前じゃないんです。



【脱炭素について】

この仕事を16年やってきて思う事は、「脱炭素」なんです。2030年までにガソリン車売るのをやめようという事。これは非常に大きな問題で、電気をどう考えるかという事になる。全部、電気になると発電所が必要になってくる（それが場合によっては原発だったりする）。そこは難しい問題。脱炭素だから一見、電気が良さそうに思えるが、実は同じ。電気を動かすにはバッテリーが必要になって、そのバッテリーを充電するには電気が必要になってくる。世の中の流れがちょっと私には理解が出来なくなっている。

車だけ見ても日本って、我々の先輩達が本当に頑張ってきたんだなあと感じている。それも官民が一体となって頑張ってきた足跡が、車に全部表れている。これから車を取り巻く環境がどう変わっていくかは分からないけれど、日本だったらウルトラCのような新たなものを創り出すのではないかと思っている。

【スバルは昔、飛行機を造っていた】

スバルの前身は中島飛行機と言い、戦後、群馬県太田市で飛行機を造っていた。その技術者達が戦後、車造りにシフトしていった。そのスバルが軽のワンボックス、サンバーを造った。

これは、配送を手掛けている赤帽という会社が、色々な車メーカーに「もっといいエンジンで、もっといい車はないか」と呼び掛けた。スバル以外のメーカーは利益の事もあり尻込みしたが、スバルだけが「やってやろうじゃないか」と技術者達が頑張って造りあげた。これは名車です。

その後スバルは会社全体が普通車しか造らなくなった。今もダイハツが造っているが、オリジナルのサンバーのエンジンはスバルの技術者の塊みたいな人達が造りあげていった。

【電気自動車って本当にいいの？】

電気自動車って今のところ、日産等が300キロ走れると言っている。だが、これは理想的なコンディションだったら、これぐらい走れるという数字、実際には300キロも走れないと思う。

それからもうひとつ、電気ですから10年前のような震災が発生した時に電気がこない。そういう危険を含んでいる。10年前の震災の時、ガソリンを入れるのに行列した人も多くて、電気の方がやっぱりいいと思うかもしれない。だけど、さっきも言ったように電気を供給するには電力が必要になってくる。そしてバッテリーをどうするのか。大量のリチウムイオンを再生できればいいのだけど、廃棄をどうするのか。

結局、一方的に良くなるという事はなくて、解決方法は何かということ、日本が軽自動車をうまく造ったような事をこれからやっていくのかなと思っている。

【日本の車検制度も優秀】

何年か前に台北に行った時、台北の朝は車の排ガスで、すごくもやっていた。日本には車検の制度があって、とてもしっかりしている。お金はかかるけれど。重量税は最初なかった。重量税をとって道路の財源に充てることにした。車検の時に環境的な排ガスのチェックをして基準値を超えると通らない。そういう事をやってきた。

【最後に】

車から環境問題を考える、車から国民性を考える。さっき言ったように本当に、車大国は敗戦から立ち上がってきた我々の先輩達が頑張ってきた証であって、これを守っていくためにも、これからの問題を乗り越えていかなければいけないし、いけると思っている。

16年前、車に興味がなく、この仕事に就いたんですが、「待てよ、こんなに面白い業種はないのではないか」と思っています。



美味な話⑥『月刊アベチアキ』

このタイトルを見て、「なんだこれは」と思われている方が多いはず。だが、その説明の前に、少しだけ又、滝の思い出話に付き合ってください。

高校を卒業してから、一年ぐらい親元を離れ生活していた。食べ盛りだったから夕方になると、いつも腹がへっていた。寮に売店があり、そこでコッペパンと出会った（もちろん学校給食のコッペパンは食べていたが）。アンパンとかクリームパンが売っているのは知っていた。けれど、イチゴジャム&マーガリンとか、あんことマーガリンが挟まっているコッペパンが売っているなんて18才まで本当に知らなかった。

それ以来、甘党の滝は、安価で腹にたまるコッペパンが大好きになった。

そう『月刊アベチアキ』とは、相模原市中央区千代田にあるコッペパン専門店である。この店は滝の通勤経路にあり、4年前にオープンしてから「月刊アベチアキという店名って、なんだろう」とずっと思っていた。

おととい、その店にやっと行き名前の由来を教えてもらった。「アベチアキというのは私の名前です。そして毎月、新しいメニュー開発していきたいという思いから（ちなみに今月は、甘夏ホイップ）『月刊』と名付けた」。という事だった。

聞いてみると、なるほどと思ったが、なかなかユニーク。アベチアキさんは町田のパンパティという店で10年間修業を積み、満を持してオープンさせた。

今日の昼食、職場の人達とこの店のコッペパンを食べた。滝がオーダーしたのは、北海道コロケとイチゴジャムマーガリン。パンもやわらかく、コロケパンなんて中身がパンからはみ出していた。

月刊アベチアキのパンは、おいしかった。どうしてもっと早く食べなかったんだろう。皆さんも相模原にお越しの際は、是非。



編集後記

「誰のために、何のために」とあんなに言っていたオリンピックが終わった。メダル獲得は過去最高。柔道の兄妹での同日メダル、卓球の男女混合ダブルスのメダルが取れた後の写真。スケートボードの若い選手達のメダル獲得、書き出したらキリがない程の感動を与えてくれた大会になった。

結果的には良かったのだろうか。それと因果関係があるのかないのか。新型コロナのデルタ株が猛威を振るっている。毎日桁違いの感染者が報道されている。このまま増え続けて人類滅亡してしまうのか、それとも集団免疫を獲得して、飲み薬も出来、以前の生活を取り戻せるのかまったくわからない。でも我々は前を向いて生きていくしかない。

今回の極みは、滝も興味がなかった車を取り上げてみましたが、皆さんにどのくらい楽しめてもらえたでしょうか。取材に協力してくださった竹島さん、本当にありがとうございました。自分の仕事になると勉強しなければいけないし、それが生きがいになっていくんだと改めて感じました。

コッペパンのアベチアキには、原稿が仕上がった時、持っていったら一発OK. をもらった。帰りにまた北海道コロッケを買って帰ったら、やっぱり美味しい。駅からは離れていますが、なんとか探して食べてみてください。

これからどんな社会になるかわからない。でも自分らしく一日一日精一杯生きていくしかない。それでは。

発行所

〒252-2042 神奈川県相模原市中央区横山 4-5-4-107

発行責任者 大滝英史

MAIL nb060234-1625@tbk.t-com.ne.jp

☎ 042(755)9105

発行協力

社会福祉法人アトリエ 一から百まで堂

〒252-0235 神奈川県相模原市中央区相生 4-13-5

振込先

フク)アトリエ

ゆうちょ銀行 〇九八(098)店

普通 1208349

記号番号 10960-12083491

